九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

高卒3年目のキャリアと意識

吉本, 圭一
日本労働研究機構副主任研究員 | 放送教育開発センター助教授

https://hdl.handle.net/2324/18790

出版情報：高卒3年目のキャリアと意識 : 初期職業経歴に関する追跡調査（第2回）より, pp.22-45, 1992-07-10. 日本労働研究機構
バージョン：
権利関係：

第１章　初期キャリアのパターンと職業生活

第１章では、序章で論じた問題意識にそって、①職業への参入のしかたと組織への関わり方をもとに、高卒者の初期職業キャリアの類型を抽出する。これをもとに、②それらが職業経歴開始前からの職業意識にもとづく積極的な選択であるのか、それとも学校や労働市場などの社会構造に由来する消極的・不本意な選択であるのか、そして、③それらのさまざまのキャリア類型の若者が将来どのような職業キャリアを展望しているのか、を考察する。

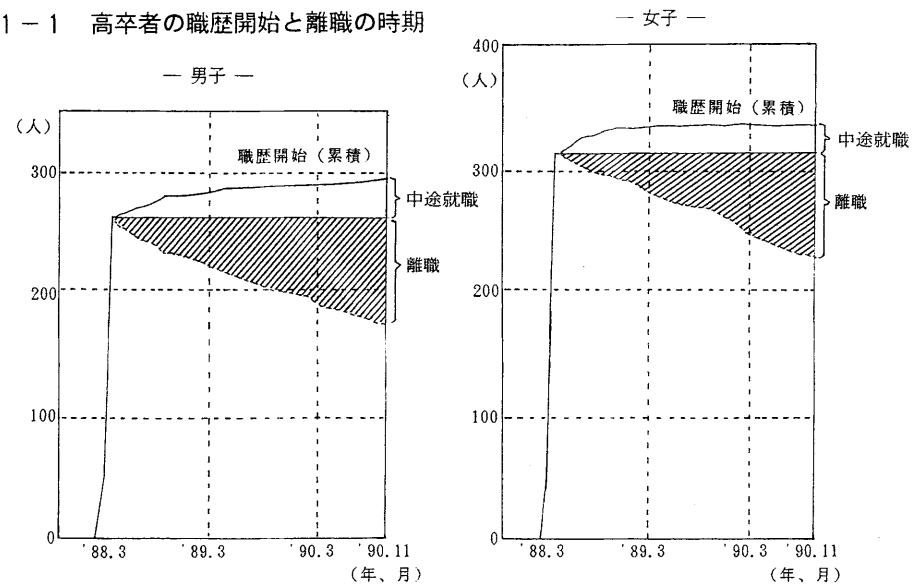
分析対象は、高卒３年目の段階で大学・短大・専門学校など上級学校に在学しておらず、またそれらを卒業もしていない 649名である。最終学歴が高卒で社会に出ている者という分類であり、上級学校中退者もこの分析対象に含めてある。

第１節　初期キャリアの類型化

１）職歴の開始時期と現況

高卒者の初期キャリアの分類軸の第一は、高卒後すぐに職歴を開始たかどうか、という点である。高卒３年目の段階で、高卒学歴で社会に出ている分析対象者 649名のうち、97.4％と、ほとんどが職業を経験し、高卒３年目の11月現在でも93.5％は就業状態にある。彼らの職歴開始時期は、図１－１のように大きく２つに分かれる。その大部分は1988年２月から４月までの就職者87.6％であり、いわゆる「新規高卒就職」にあたる。

図１－１　高卒者の職歴開始と離職の時期



これに対して、1988年５月以降1990年12月までに職歴開始した者も 7.9%あり、本報告書では、以下「中途就職」類型として扱う。彼らの職歴開始時期は比較的分散しているが、その中では高卒の年の10月までの職歴開始が多い。

この「中途就職者」の一部は、就職を希望しながら就職先が見つからないまま就職時期が遅れた者もいる。他方で「中途就職者」の中で、上級学校の中退者が27.5%を占めており、労働市場以外の問題も指摘できる。さらに、高卒でしばらく無職でぶらぶらした後の就職、浪人からの変更などもあり、「中途就職」がただちに不本意な選択と決めつけることもできない。

ともあれ「中途就職」に至る経路はまちまちであるが、学校を離れてから職歴を開始しているため、その就職経路や就職機会などに共通の特徴なり、問題があるものと思われる。

性別でみると、男子で中途就職が10%多い。これは次章でも検討するように、男子で浪人後の就職など進学希望からの女子６%と比べて進路変更の比率も多いためである。

２）非正規就業の経験

近年の若者の働き方で注目されているのは、組織からの束縛を避けることである。この点で、組織とゆるい関係をもつ「パート」「アルバイト」「臨時」「派遣」などの、以下で「非正規就業」とよぶ経験を持っている者と、「正社員」「自営業・家業」という「正規就業」の経験のみの者を区別してみた。

表１－１にみるように、①高卒後の初職については、「正規就業」が92.7%（正社員91.1%、自営・家業 1.6%）と大半であるが、初職から「非正規就業」というケースも 4.4%ある。正社員の比率を学科別にみると、商業科の93.2%、工業科の93.4%と比べて、普通科では正社員比率が83.3%と低くなっている。

②高卒３年目の現職についてみると、「正規就業」90.8%（正社員89.5%、自営家業 1.3%）に対して、非正規就業者が 5.4%と、わずかながら増加している。

③こうして「非正規就業経験者」を累計すると、「新規高卒就職者」だけをとりだしても、こうして高卒後２年８ヶ月の間に、15.1%の高卒者が非正規就業を経験している。こうした傾向について、男女別、学科別には、大きな違いはない。

以下、高卒者の初期キャリアの分類軸の第二として、新規高卒就職者を「非正規就業経験の有－無」で区分することにする。これは、序章で指摘したように、「非正規就業経験」が、近年の若年者の組織との関わりにおける何らかの特徴的な行動ではないかとの仮説にもとづくものである。とはいえ、これはいわゆる「フリーター」とは一致しない。たまたま一時的に非正規就業した者をも含んでおり、彼らが非正規就業をくり返している、あるいはそうであろうといった仮定はできない。

表１－１　非正規就業経験

(1)　初職の就業形態　　%、(　) 実数

	合　計	正社員	パート・アルバイト・臨時	自営・家業	その他	無回答
合　計	100.0(632)	91.1	4.4	1.6	2.4	0.5
男　子	100.0(295)	90.5	5.4	1.7	1.7	0.7
女　子	100.0(337)	91.7	3.6	1.5	3.0	0.3
普通科	100.0(108)	83.3	9.3	2.8	3.7	0.9
商業科	100.0(294)	93.2	4.1	0.3	2.4	0.0
工業科	100.0(196)	93.4	2.6	2.6	1.0	0.5

(2)　現職の就業形態

	合　計	正社員	パート・アルバイト・臨時	自営・家業	その他	無回答
合　計	100.0(607)	89.5	5.4	0.3	0.6	0.2
男　子	100.0(289)	87.9	6.6	1.7	3.8	0.0
女　子	100.0(318)	90.9	4.4	0.9	3.5	0.3
普通科	100.0(102)	87.3	4.9	2.9	4.9	0.0
商業科	100.0(285)	90.9	5.6	0.4	2.8	0.4
工業科	100.0(192)	89.1	4.7	2.1	4.2	0.0

(3)　これまでの就業形態（複数回答）

	合　計	正社員	パート・アルバイト・臨時	自営・家業	その他	無回答
合　計	100.0(649)	92.4	19.3	2.9	0.0	3.1
男　子	100.0(307)	89.6	21.2	2.9	0.0	4.2
女　子	100.0(342)	95.0	17.5	2.9	0.0	2.0
普通科	100.0(117)	85.5	20.5	3.4	0.0	7.7
商業科	100.0(296)	96.3	17.2	2.7	0.0	1.0
工業科	100.0(202)	90.6	20.3	2.5	0.0	3.0

3）離職、無業経験の有無

定着－離職という初期キャリア分類の第三の尺度も、組織への関与の強さと関係している。高卒3年目までの定着－離職状況をみたものが、表1－2である。

表1－2　初職の継続状況（性、卒業学科、出身地域別）

	合　計	勤め続けている	やめて現在は違う仕事	やめて現在は仕事をさがしている	やめて現在は仕事をさがしてない
合　　計	100.0(632)	67.2	28.8	2.5	1.4
男　　子	100.0(295)	65.4	32.5	1.4	0.7
女　　子	100.0(337)	68.8	25.5	3.6	2.1
普　通　科	100.0(108)	59.3	35.2	3.7	1.9
商　業　科	100.0(294)	74.1	22.8	2.4	0.7
工　業　科	100.0(196)	64.8	33.2	1.5	0.5
需要地域	100.0(184)	70.7	25.5	2.7	1.1
需給バランス地域	100.0(221)	68.3	29.4	1.4	0.9
供給地域	100.0(227)	63.4	30.8	3.5	0.2

「新規高卒就職者」の70.4%が初職を継続し、離職経験者が29.6%いる。労働省「新規高卒者の就職離職状況報告」における近年の数値（1987年高卒者の卒業後3年間の離職経験率42.6%）からみると、本調査の離職経験率（卒業後2年8ヶ月）は若干低くなっている。追跡調査では、住居にせよ職場にせよ移動したサンプルの捕捉率は低くなるのが通例であり、また卒業3年間という区切りまでまだ時間がある点を勘案すれば、このサンプルが調査開始時点ではほぼ全国サンプルと同じ傾向であり、現時点でも大きなずれはないとみてもよいのではなかろうか(1)。

データにもどって、「新規高卒就職者」の中でも「非正規就業経験者」という類型に属する者の初職継続率は33.7%にとどまっており、多くが離職経験者ということになる。また、「中途就職者」のばあいには、初職継続率は41.2%にとどまり、離職経験者が58.8%と過半数いる。

長期的な無業、失業の経験についてみると、図1－2のように、80.6%の高卒者は1ヶ月をこす無職や職探し期間を経験していない。また長期無業期間があるにしても、「職業を探し」ながらの無業、すなわち正確な意味での「失業」期間があるのは、16.9%にとどまっている。これまで検討

してきた初期キャリアとの関連でみても、正規就業で離職経験のある者でも、長期失業経験者は40.6%にとどまり、半数以上の54.7%はこうした無業期間を経験していない。近年の若年者の労働市場環境の良さを反映したものとみてよいだろう（図1－3）。

図1－2　無職期間の有無

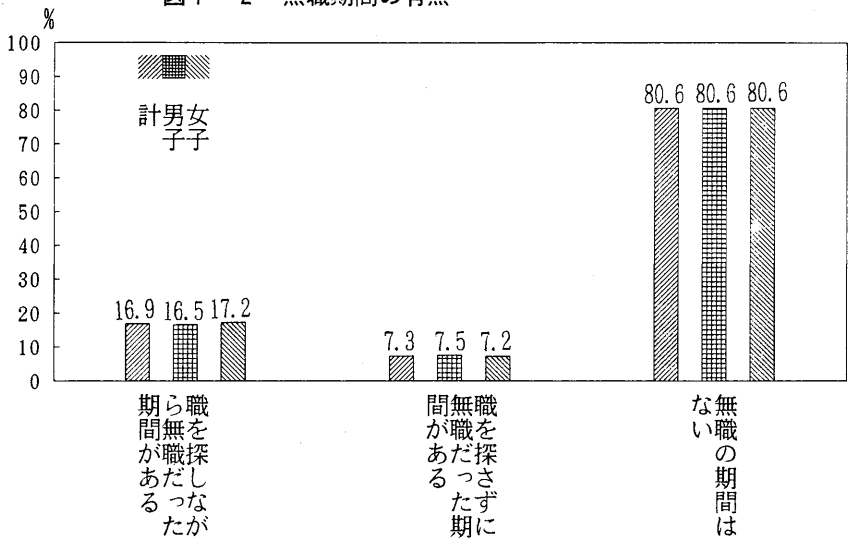
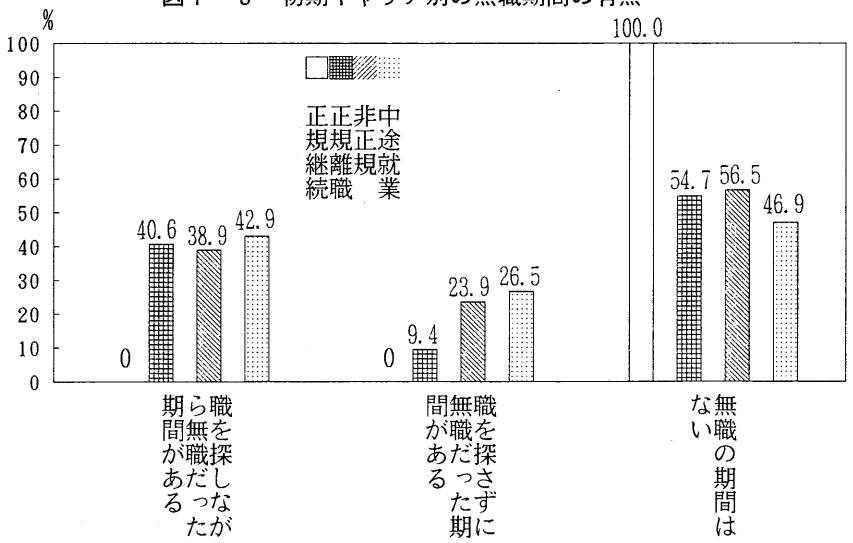


図1－3　初期キャリア別の無職期間の有無



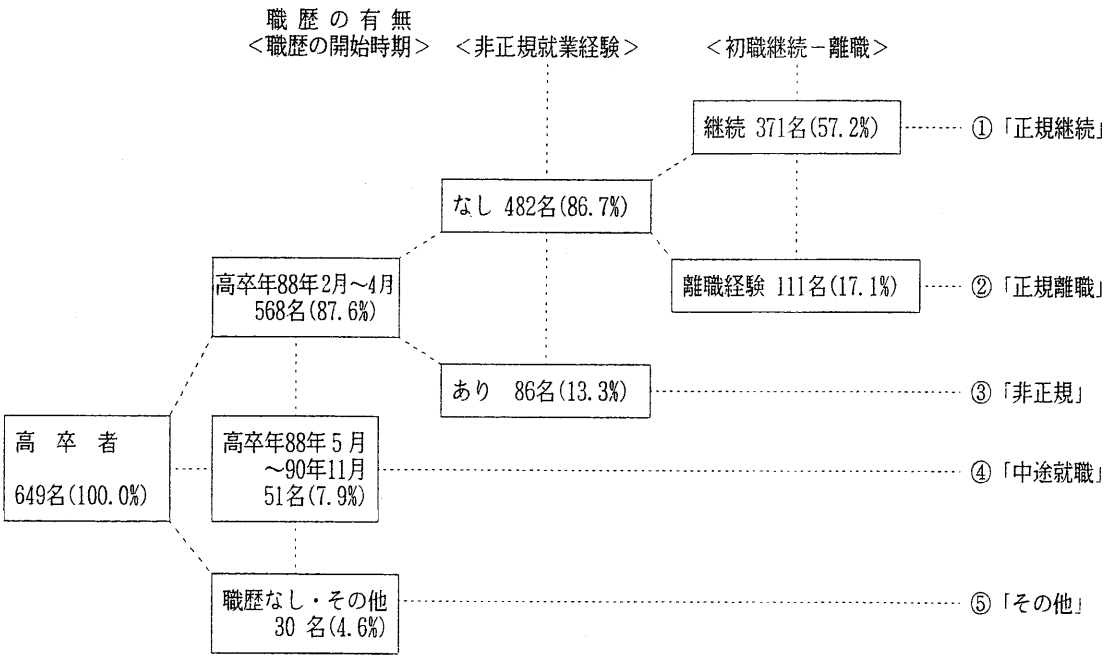
他方「職を探さずに1ヶ月以上無職だった」経験がある者が、7.3%となっており、こうしたケースに関しては、若年者の職業意識サイドについての検討が必要であろう。

なお、これらの長期無業の経験については、学科別では普通科卒で「１ヶ月以上の失業」経験の率が22.5%と高く、他方で商業科卒では11.3%と低くなっている。性別・地域別には、統計的に有意な差はない。（以下「正規継続」と略す）

4）高卒初期キャリアのパターン

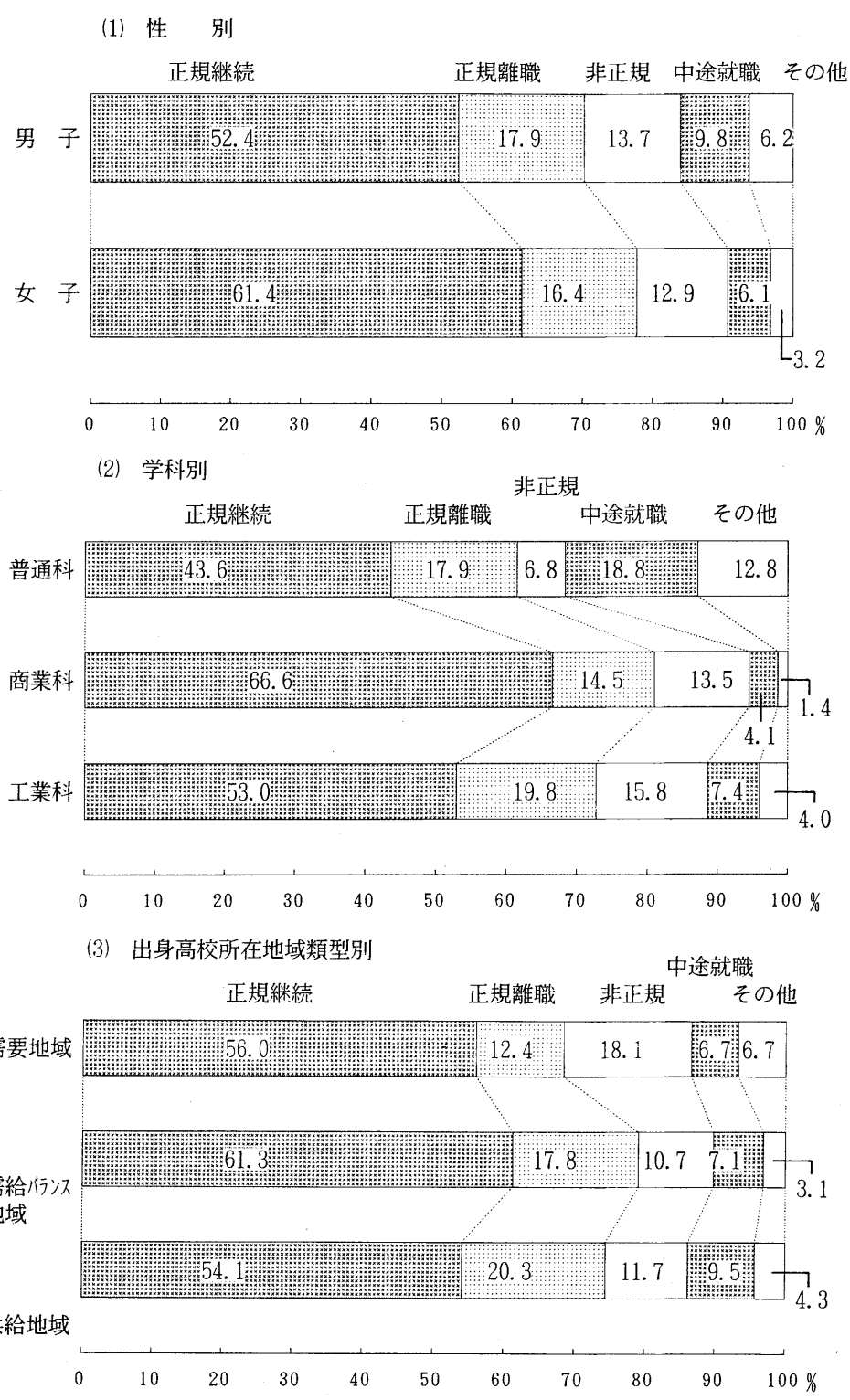
こうして、以上の３つの基準を組み合わせて、図１－４のように「新規高卒・正規就業・初職継続」という半数以上の者がたどった標準的なキャリア（以下「正規継続」と略す）と、その他の「新規高卒・正規就業・離職経験」（「正規離職」）「新規高卒・非正規就業経験」（「非正規」）「中途就職」という３つの、それぞれに組織への関与の程度が低いと想定される職業キャリアを区別することができた。属性別の傾向は図１－５に示す通りであり、性別では男子で「中途就職」が若干多く、女子で「新卒就職」の３類型が多い。

表１－４　高卒者の初期職業キャリアのパターン



また、出身地域別には、需給バランス地域で「正規継続」類型が多く、需要地域で「非正規」類型が多いことが分かる。需要地域の若者のばあい、正規雇用の労働需要の絶対量が不足しているために「非正規」の就業を経験するというよりも、豊富な選択肢の中から非正規の就業を経験してい

図１－５　諸属性別の初期キャリア



る。また、需給バランス地域で「正規継続」が多い点は、自宅からの通勤可能性の高さと関連していると思われる。

学科別には、普通科で「中途就職」が多く、進学後の中退、浪人からの就職などというケースがこれに該当する。

本章の以下各節では、初職、転職、現職の状況それぞれをこの４つの類型と関連づけて描くことで、高卒者の初期キャリア、職業生活について検討したい。

第２節　初職の状況と初期キャリア

本節では、初職の状況について、就業形態、就職経路、産業・規模・職業をみていくことにする。また、初期キャリアの諸類型との関連を検討する。

１）初職の状況

①　初職の就業形態と就職の経路

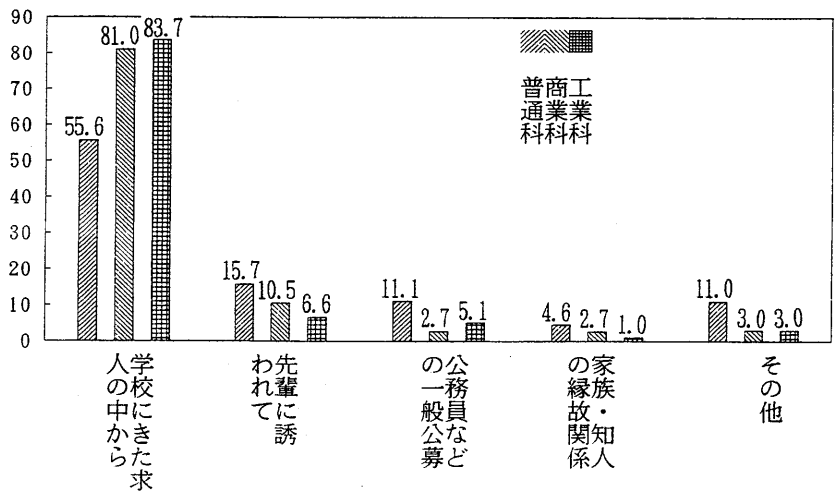
就業形態では、すでに類型化の際に明らかになったように、正社員が91.1％と大半であるが、初職からパート・アルバイト・臨時というケースも 4.2％ある。

就職の経路としては、「学校にきた求人の中から」が77.5％であり、これに「公務員などの一般公募」10.1％、「家族・知人などの縁故関係」 4.7％などがくわわっている。

性別では、女子で一般公募が12.8％（男子は 7.1％）と多い傾向にある。

また、学科別には、図１－６のように普通科では学校経由が55.6％と少なく、一般公募と縁故が多い。特に男子だけでみると、普通科の学校経由の比率は39.5％と過半数を割っている。これは、男子で中途就職が多いなどの影響も含まれたものである。

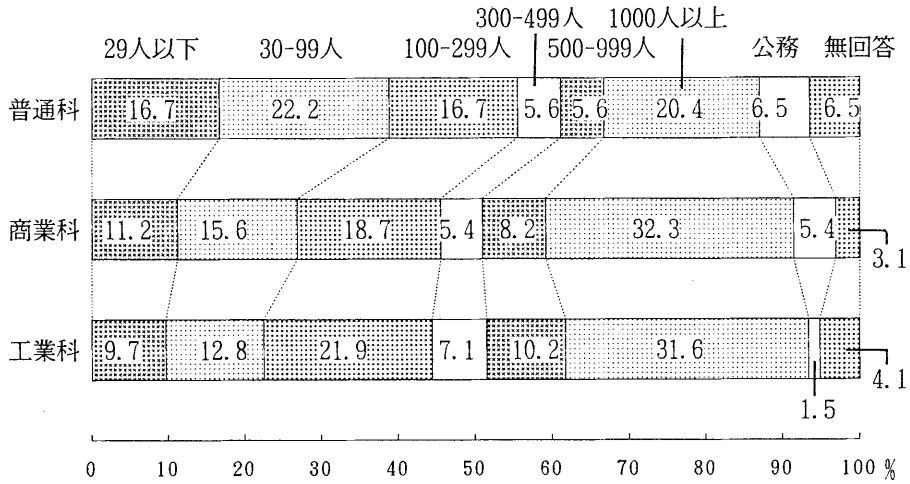
図１－６　学科別の初職入職経路



② 初職の企業規模・産業・職業

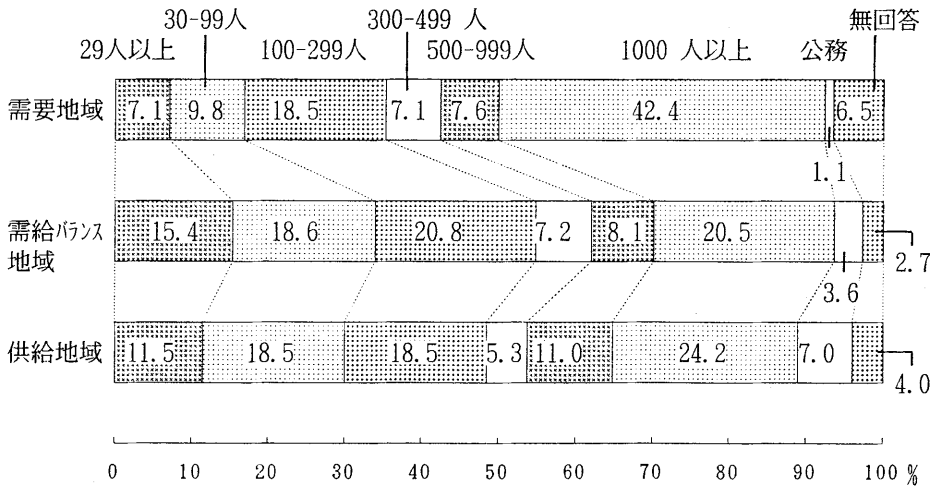
企業規模では、1,000 人以上の企業が29.3%、公務が 4.1%である。学科別では、図１－７のように、職業科で、大企業・官公庁への就職が多くなっている。

図１－７　学科別の初職の企業規模



地域別には、図１－８のように労働力需要地域で大企業への就職者が多い傾向にある。他方、労働力の供給地域でも必ずしも中小企業は多くない。これは、地元での官公庁への就職、大都市での大企業就職があるためとみられる。これに対して、労働力の需給バランス地域では比較的中小企業が多い[(2)]。

図１－８　地域類型別の初職の企業規模



2）初職開始時期と初職の状況

初職と初期キャリアとの関連について、まず表１－３のように、「新規高卒就職」か「中途就職」かによって、初職の状況がどれほど違っているのかをみよう。

表１－３　初職の就業形態と入職経路

(1)　就業形態

	計	正社員	パート・アルバイト・臨時	自営・家業	その他	無回答
新卒就職	100.0(568)	94.2	2.3	1.2	2.3	0.0
中途就職	100.0(51)	66.7	25.5	3.9	2.0	2.0

(2)　入職経路

	計	学校にきた求人の中から	公務員などの一般公募	家族・知人の縁故関係	先輩に誘われて	新聞広告	アルバイト先だった	職業安定所の紹介	ガイドブックや会社案内	その他
新卒就職	100.0(568)	82.4	9.7	2.8	2.5	0.5	0.7	0.4	0.2	0.9
中途就職	100.0(51)	27.5	15.7	25.5	2.0	3.9	9.8	2.0	9.8	2.0

第一に、当然ながら入職経路に大きな差がある。学校にきた求人の中から選んで決めた比率は、「新卒就職」者の82.4%に対して、「中途就職」者では27.5%にとどまる。「中途就職」者では、家族・知人の縁故が25.5%、公務員などの一般公募が15.7%など多様な経路で就職している。

それと関連して、第二に就業形態でも、「新卒就職」の94.2%が正社員として初職をスタートさせているのに対して、「中途就職」では66.7%にとどまる。「中途就職」者では25.5%、４人にひとりがパート・アルバイト・臨時の仕事で初職をはじめている。

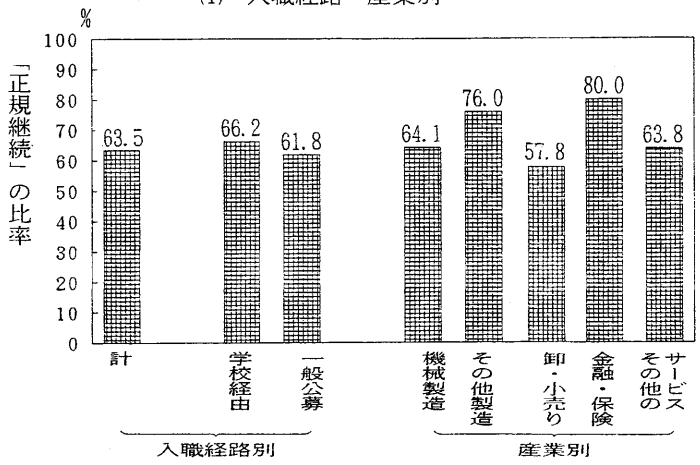
また第三に、企業規模では大企業、産業では金融・保険業、職業では事務職への就職は、「新卒就職」で多く、「中途就職」で少ない。これは、特に女子だけとりだしても顕著にみられる傾向である。

3）初職の条件別にみた「新規高卒就職」者の初期キャリア

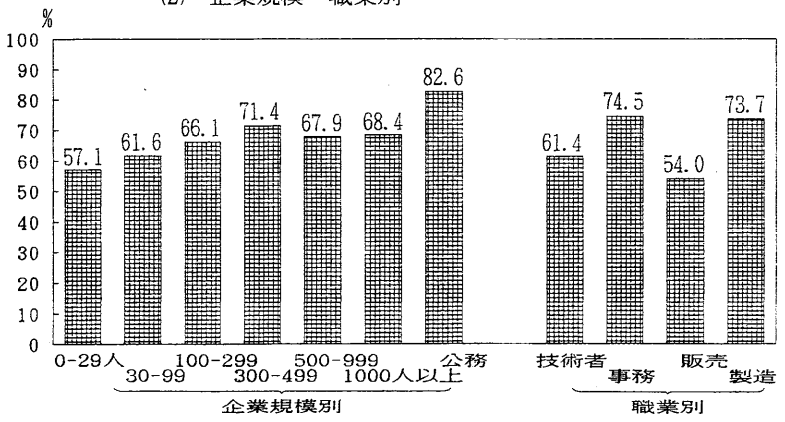
つぎに、「新規高卒就職」者 568名だけをとりだして、図１－９のように、その後ほぼ３年間の初期キャリアの分化を、初職の条件との関連でみていく。特にどのような初職の条件の下で、「正規就業・継続」の類型が増えるのか減るのかに注目する。

図１－９　初職条件の正規継続率（新規高卒者中）

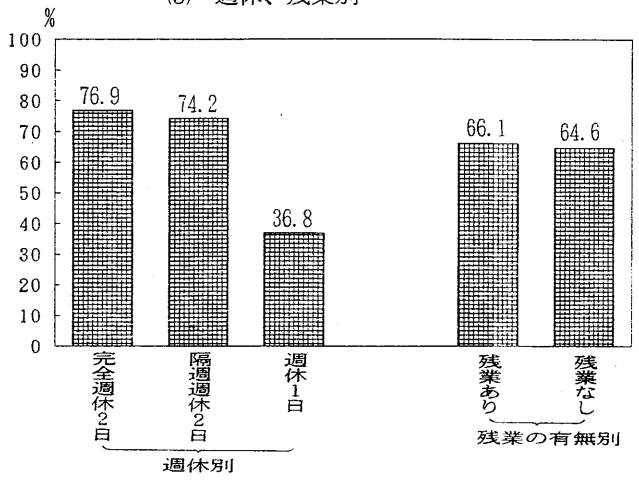
(1)　入職経路・産業別



(2)　企業規模・職業別



(3)　週休、残業別



就職経路別にみると、学校経由で初職を開始した者の66.2%は「正規継続」類型であるのに対して、一般公募、縁故のばあいこうした類型に入る可能性は低い（それぞれ61.8%、50.0%）。

つづいて初職の産業別には、金融保険業と公務で「正規継続」類型が8割以上であり運輸・通信、卸・小売り、個人サービス業で6割未満になっている。

職業別には、事務、製造の職業で「正規継続」が7割以上、販売、運輸、建設の職業で6割以下となっている。

企業規模別では、統計的に有意な差はない。

第3節　転職者の初職と現職

1）就業形態、転職の経路

転職を経験して現在職業についている者が、高卒者のうち28.0%(182名）にのぼる。彼らの71.0%は2つの会社を経験し、15.5%が3つの会社を経験して現職にいたっている。

彼らの現職の就業形態と入職経路を、その初職と比較してみよう。表1－4のように、就業形態

表1－4　転職者の就業形態・入職経路

(1)　就業形態

	正社員	パート・アルバイト・臨時	自営・家業	その他	無回答	合　計
初職の就業形態	84.6	9.9	2.2	2.2	1.1	100.0(182)
現職の就業形態	76.9	13.7	1.6	7.1	0.5	100.0(182)
初職の各形態別にみて現職が同じ形態の比率	80.5	27.8	25.0	……	……	(1) 72.6

注(1)　合計に関する同形態比率は・初職・現職いずれかで「その他」「無回答」の者を除外して、分母・分子を計算したものである。

(2)　入職経路

	学校にきた求人の中から	公務員等一般公募	縁故関係	新聞広告	職業安定所の紹介	アルバイト先だった	先輩に誘われて	ガイドブックや会社案内	その他	無回答	合　計
初職の入職経路	70.3	10.4	8.2	3.3	2.7	1.1	1.1	0.0	1.6	1.1	100.0(182)
現職の入職経路	0.5	3.8	28.0	19.8	18.1	2.7	1.6	7.7	14.3	0.0	100.0(182)

については、正規就業が減り、その分非正規就業が 9.9%から13.7%へと増えている。また、転職の経路は、学校経由の初職とは異なり、家族・知人の縁故（28.0%）、新聞広告（19.8%）、公共

職業安定所の紹介（18.1%）などの多様な経路が利用されている。

2）産業・規模・職業

業種については、表1－5のように卸小売業と個人サービス業が減り、その他のサービス業が増えるなどの傾向が見られるものの、全体的な分布に大きな違いはない。個々にみると、業種12分類が判明している者のうち27.3%(38/139)が同じ業種に転職しており、同業種間の転職傾向があることがわかる。

表1－5　転職者の業種・規模・職業

(1) 業　種

	建設業	機会器具製造業	その他の製造業	電機・ガス・水道業	運輸・通信業	卸・小売・飲食業	金融・保険業	情報サービス・調査	医療・保健・社会福祉	合　計
初職の業種	5.1	12.6	13.1	1.7	6.3	21.7	2.9	7.4	4.6	100.0(175)
現職の業種	6.9	10.3	10.3	4.0	5.1	17.7	2.3	2.9	4.6	100.0(175)
初職の業種別にみて現職が同じ業種の比率	44.4	9.1	21.7	33.3	0.0	31.6	0.0	23.1	37.5	(1) 27.3

注(1)　合計に関する同形態比率は・初職・現職いずれかで「その他」「無回答」の者を除外して、分母・分子を計算したものである。

(2) 企業規模

	29人以下	30- 99人	100-299人	300-499人	500-999人	1000人以上	公　務	無回答	合　計
初職の企業規模	17.0	19.2	17.0	6.6	7.7	23.1	1.6	7.7	100.0(182)
現職の企業規模	24.7	19.8	15.4	6.0	6.0	19.2	3.8	4.9	100.0(182)

(3) 職　業

	技術者	専門的職業	事　務	販　売	建　設	運輸・通信	製　造	保　安	サービス	その他・よくわからない	無回答
初職の職業	9.1	4.0	24.6	16.6	5.7	6.3	13.1	0.0	8.6	8.6	3.4
現職の職業	8.0	2.9	32.6	17.7	5.1	4.0	16.6	0.6	6.3	0.0	0.0
初職の職業別にみて現職が同じ職業の比率	37.5	14.3.	69.8	27.4	20.0	0.0	30.4	0.0	26.7	0.0	0.0

注(1)　合計に関する同形態比率は・初職・現職いずれかで「その他」「無回答」の者を除外して、分母・分子を計算したものである。

企業規模では、1000人以上の大企業が減り、29人以下の小企業が増えているが、個々にみると小企業から大企業への転職などもあり、初職との関連は見られない。

職業的には、事務の職業と製造の職業が増えている。個々にみると、職業9分類が判明している者のうち、40.0%（58/145）が同じ職種に転職しており、同職種間の転職傾向が強いことがわかる。

3）労働条件

休暇・残業などの労働条件については、表1－6のように、転職することで「週休1日」の比率が減り、「完全週休2日」「隔週週休2日」がそれぞれ増加している。これは、高卒後の初職につ

表１－６　転職者の労働条件

(1) 週　休

	完全週休２日	隔週週休２日	週休１日	その他	無回答	合　計
初職の週休	10.9	19.6	41.3	19.6	8.7	100.0(46)
現職の週休	15.2	30.4	30.4	15.2	8.7	100.0(46)

(2) 残　業

	あり	なし	無回答	合　計
初職の残業	69.2	25.8	4.9	100.0(182)
現職の残業	59.9	35.7	4.4	100.0(182)

いた1988年当時から高卒３年目調査時点の1990年へかけての時代的変化も大きく加わっているものと思われるが、個々にみても好条件への転職が逆方向の転職よりも多くなっている。

残業についても、「残業あり」の比率が10%ポイント低下し、個々にも条件が良い方へ転職している者が多い。

４）職業選択の条件

仕事の選択の際重視したことを、現職と初職とで比較してみると、表１－７のように、いずれの選択でも「自分の能力や性格をいかせる」という条件が第一にきており、選択の順序に極端な変化はない。とはいえ、世間的な知名度による選択が減り、収入・休暇・拘束時間などへのこだわりが増えており、実利的な志向が強まっているということではないだろうか。また、他方で、「組織にしばられないこと」という選択も多くなっており、若年者の職業意識の変化に対応する結果であるのかもしれない。

表１－７　仕事選択の際の重視条件（初職と現職）

	能力・性格	安　定	有　名	通勤距離	収入が多い	将来性
初　職	52.4	35.7	28.6	28.6	26.2	19.0
現　職	45.2	31.0	16.7	26.2	33.3	19.0

	好きなモノ	家族の希望	休日・休暇	転勤がない	拘束時間短	縛られない
初　職	16.7	16.7	14.3	14.3	7.1	4.8
現　職	21.4	16.7	33.3	14.3	19.0	16.7

第４節　現職と職場環境

１）初期キャリア別にみた現職

①　就業の状態

高卒３年目までの初期キャリアを４つの類型にまとめたが、それぞれのキャリアごとに、現在どのような職業生活を送っているのか、比較してみよう。それぞれの類型ごとには、現在の状態は「正規離職」者では、10.8％までが現在無業である。他方、「非正規」の者のうちでも、9.３％が無業状態であり、33.7％は初職を継続中である。

就業形態としては、「非正規」の者のうち66.7％は現在は正社員として働いている。また、「中途就職」者においては、正社員は78.7％と少なくなっている。

②　現職の産業・職業

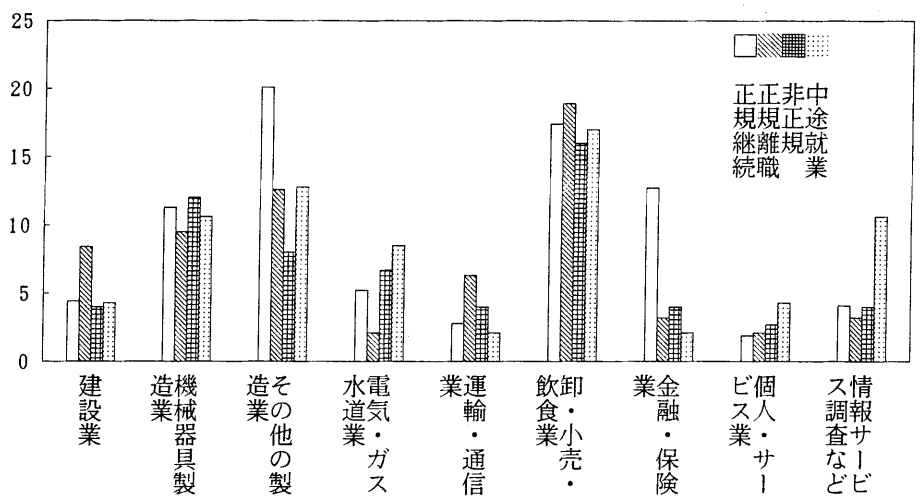
業種では、金融保険業の比率で、初期キャリアの類型によって大きな差があり、「正規」類型の12.7％がこの産業へ勤務しているが、他の類型では５％に満たない。

企業規模では、いっそう顕著な差異を生じており、「正規離職」者の就業先の企業規模が小さいことがわかる。

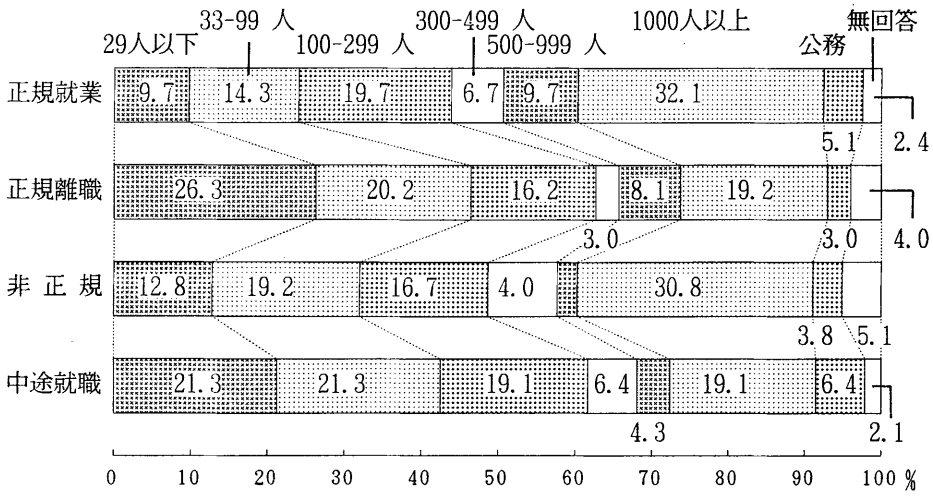
職業別では、事務の職業、製造の職業で「正規継続」パターンが多くなっている。

図１－10　初期キャリア別にみた現職の状況

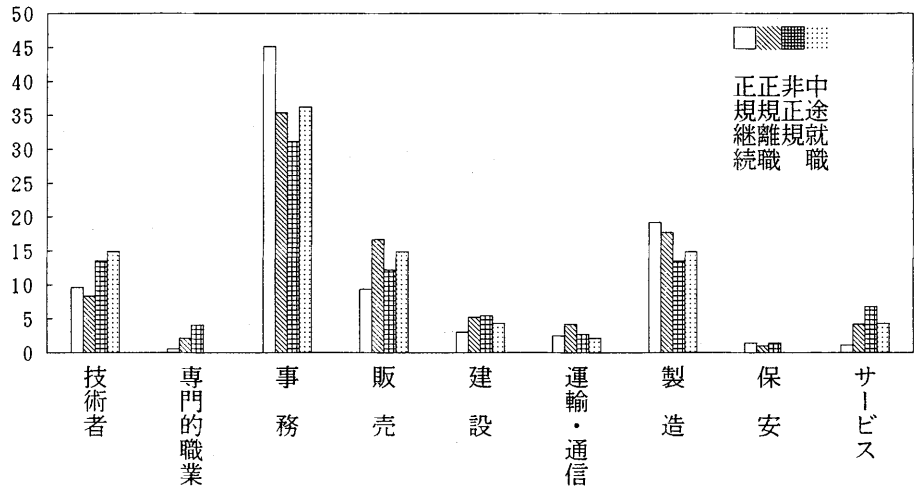
(1)　業　種



(2) 規 模



(3) 職 業



③ 労働条件

労働条件では、週休２日制の整っている職場の割合で並べると、「正規継続」「中途就職」「非正規」の順になる（図１－11）。他方、残業の有無でいうと、「正規継続」類型でもっとも高い比率になっている。休みもある分、残業もあるというわけである（図１－12）。

図１－11　初期キャリア別にみた現職の週休制度

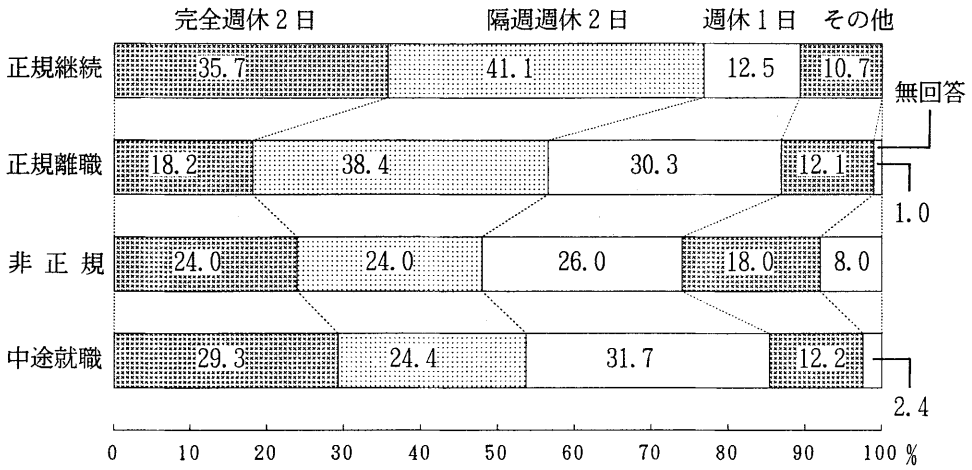
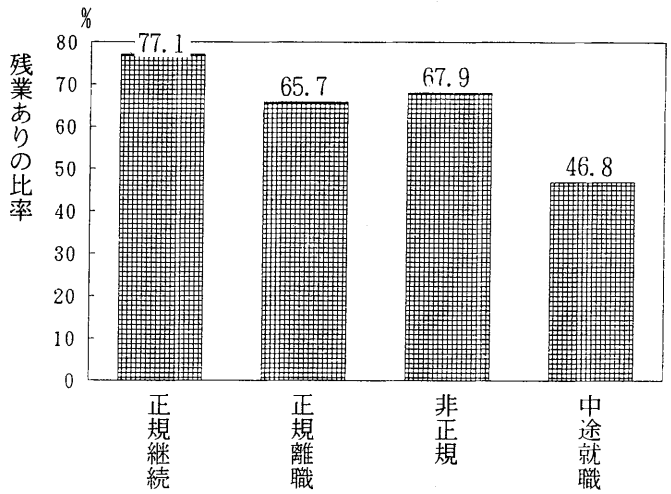


図１－12　初期キャリア別にみた残業の有無



２）現職の会社・仕事・職場環境

①　会社・職場の状況

若者の職場選びの基準について、「花長風月」などという造語もできるようだが、社風や職場の風土も、高卒者がキャリアを築いていくうえで重要な要素である。ここでは、会社・職場の状況については、次の５項目について、現在の職場を評価してもらった。

ｲ)世間に知られた会社である

ロ)毎年のように学校の先輩が就職している

ハ)先輩は仕事のやり方をよく教えてくれる

ニ)身なりや言葉遣い、出勤の管理が厳しい

ホ)職場に仕事観で影響を受ける人がいる

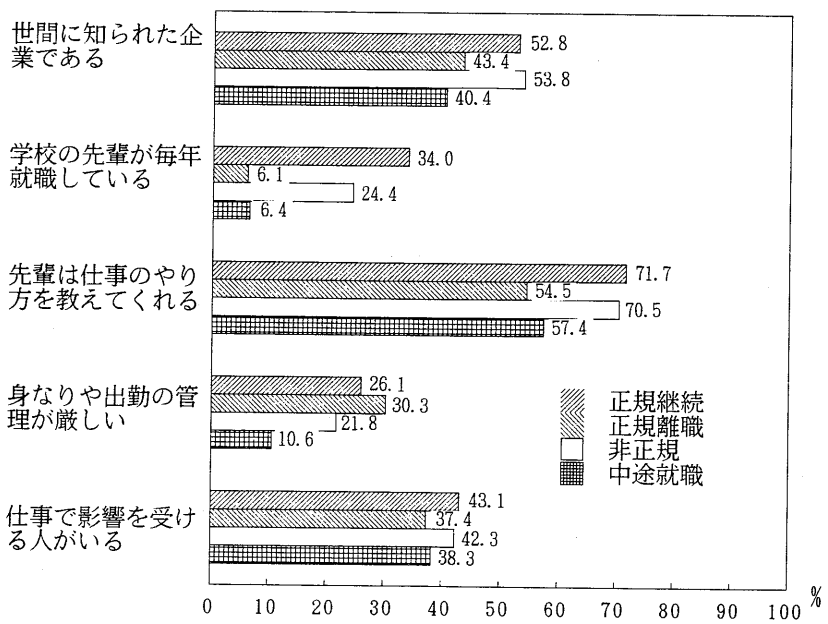
最初の2項目は会社の客観的な条件、あとの3項目が職場の環境・風土に関わるものである。初期キャリア別に、これらの項目を比べてみると、図1－13のようにどの項目についても、初期キャリア別に大きな差がある。

全体として「正規継続」者では、現在の会社・職場を良好なものと評価している傾向がある。特に、「高校との就職実績のある企業」という比率はもっとも高く、そのためでもあるのか、先輩との関係にも肯定的な評価が高い。ただし、幾分か管理の厳しさを指摘する者もいる。

つぎに、「非正規経験」者のばあいも、会社の知名度への評価はもっとも高く、さらに先輩との関係をはじめ肯定的評価が高い。

これに対して、「正規離職」者と「中途就職」者では、知名度が低い会社が多くなり、出身高校との関係はほとんどない。また職場では、仕事で頼りになる先輩を見いだせないでる者が、他の類型よりも多い。また、「正規・転職経験者」は、　管理の厳しさを意識する者が多く、この点では「中途就職者」にはそうした意識が少なく、傾向が分かれている。

図1－13　初期キャリア別にみた会社・職場環境



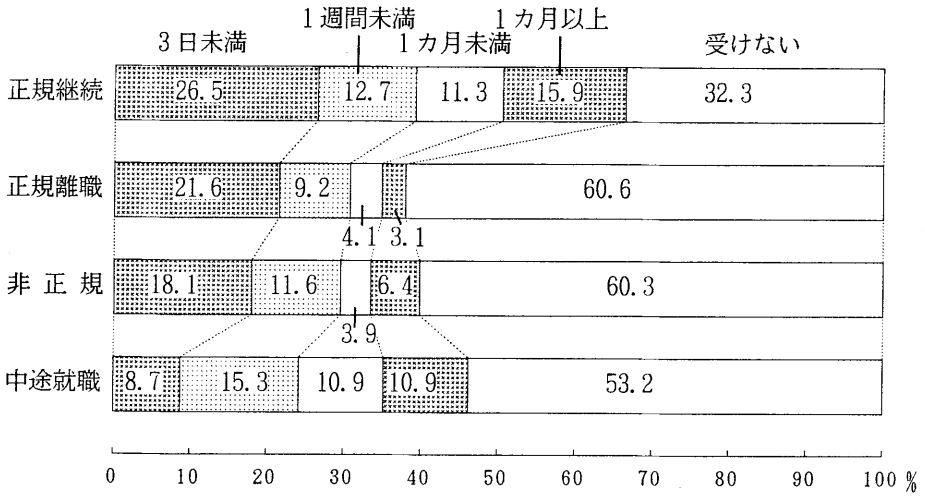
② 教育訓練

職場での「講習や実習など」の教育訓練の受講とその期間について質問した結果が、図1－14である。教育訓練を受けた比率は、高卒者全体の55.8%である。期間はまちまちであり、受講者の40.7%は「3日未満」の教育訓練であり、他方で「1ヶ月以上」という教育訓練を受けている者も21.2%ある。

性別では、男子のばあいには60.2%が教育訓練を受けており、またその期間も1ヶ月以上がほぼ3割など長くなっている。女子では、教育訓練を受ける比率も52.1%と低く、しかもその訓練の半数以上はわずか「3日未満」となっている。

初期キャリア別にみると、「正規継続」者の66.8%がまとまった教育訓練を受けており、しかも長期の訓練が多いのに対して、他の類型ではいづれも教育訓練を受けている比率も半数以下にとどまり、訓練期間も短いものが多くなっている。すなわち、「新規高卒」で就職するばあいには、それなりに教育訓練を計画して実施しているのに対して、転職や中途就職などで五月雨的に就職しても体系的な教育訓練を受けにくいということであろう。教育訓練の充実度と初期キャリアとの関連の強さが指摘される。

1－14 初期キャリア別の教育訓練



③ 仕事内容と将来展望

現職の状況を理解するには、会社・職場の制度・雰囲気を見るとともに、何よりも職場内での個々人が担当している仕事とその将来的な仕事の展望をみておく必要がある。仕事の面白さや将来のチャンスについては、次の4項目を用意した。

イ) 仕事はおもしろい

ロ) 仕事は同じことのくり返しである

ハ) 昇進の可能性は高卒者も大卒者も同じ

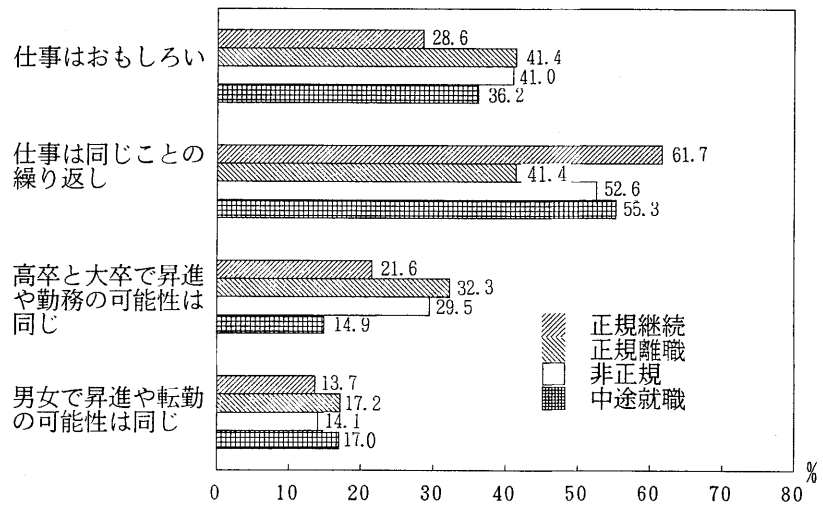
ニ) 男女で昇進の可能性は同じ

これらの項目への評価を初期キャリア別にみたものが、図1－15である。その評価は、先にみた会社や職場環境についての傾向と、完全に逆である。

すなわち、「おもしろい」比率がもっとも低く、6割以上が「同じことの繰り返し」と評価しているのが、「正規継続」者の仕事なのである。逆に、会社や職場への評価が低かった「正規離職経験」者は、4割以上が「おもしろい」と答える仕事をしており、単調さを指摘する率がもっともひくい。

昇進の可能性では、高卒と大卒で同じと回答しているのは、対象者全体の23.6%にすぎないが、「正規・離職経験」者では、32.6%となっている。男女での昇進の可能性についても、傾向は同じである。すなわち、学歴・性別いずれでみても、「正規継続」者の方が「正規離職経験」者よりも、チャンスが限定された職場に留まっているということが分かる。もちろん、それは裏返して、離職経験者がチャンスのより開かれたところへ転職した結果でもある。

図1－15　初期キャリア別にみた仕事と昇進の可能性



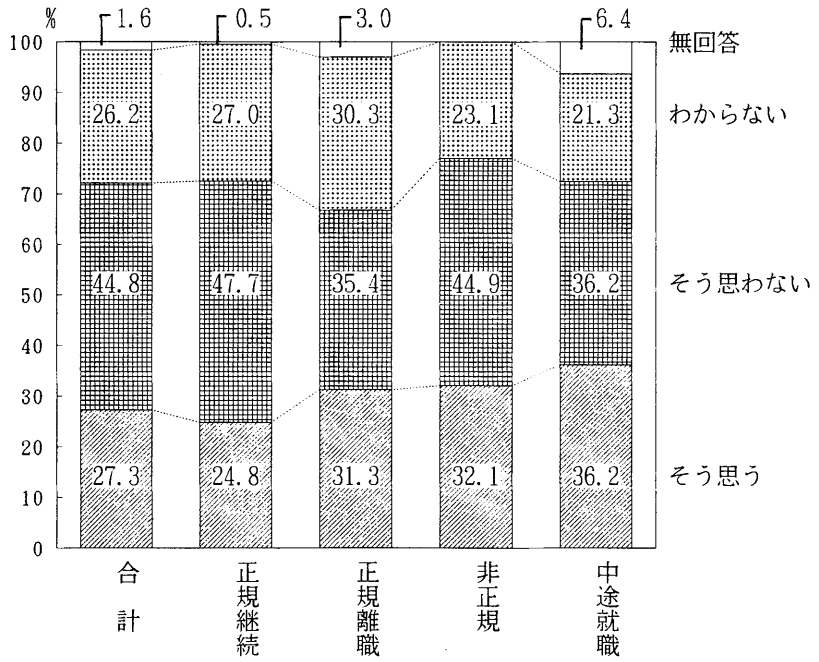
3)　現職への満足度

以上のさまざまの職場の条件を総合した指標として、「全体として今の職業生活に満足している」かどうかを質問した。図1－16でみると、性別などの属性別には大きな違いはない。初期キャリア

別に違いがあり、「中途就職」「非正規」「正規離職」の順に職業生活への満足度が下がり、「正規・継続」者でもっとも満足度がひくい。

全体としての職業生活への満足度がとくに職業生活のどんな側面と関連するのかをみるために、前項の会社・職場・仕事・可能性の各項目あわせて9項目との関連度をみた。関連の高い順に、「職場で仕事観について影響を受ける人がいる」「仕事はおもしろい」「男女で昇進の可能性が同じ」「可能性は高卒と大卒で同じ」「世間に知られた会社である」「先輩は仕事のやりかたをよく教えてくれる」という順になっている。

図1－16　今の職業に満足しているか



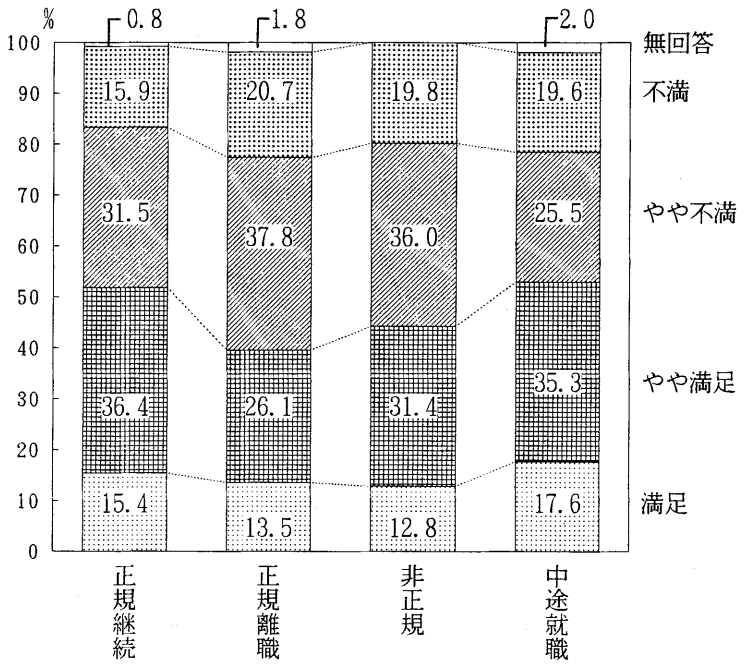
4）高卒後の進路選択への満足度

高卒後これまでの進路選択への満足度をみると、前項の「職業生活への満足度」と有意な関連はあるものの、それぞれの属性との比較をすると、異なる側面が見えてくる。

4つの高卒初期キャリアパターン別に、進路選択への満足度を比較すると、図1－17のように、満足度の高い順に「中途就職」「正規・初職継続」「非正規就業経験」「正規・離職経験」となる。

主観的な満足度については、評価の仕方は議論の分かれるところであろうが、ひとつには自発的な選択にかかわる満足という側面がある。つまり、高校卒業後の進路選択への満足度は、高卒1年

図１－17　初期キャリアと現在までの進路選択満足度



目までの分析（日本労働研究機構『高卒者の進路選択と職業志向』1990年）でも指摘したとおり、「自発的に選択したという感覚」が強いほど満足度が高く、学校の振り分けなど他の要因によって強いられたという感覚が強いほど満足度は低い傾向にある。こうした点からみるならば、「中途就職」はより積極的な選択であり、「正規離職」は不本意な側面が強いのかもしれない。ともあれ、こうした点について結論をだすのは早計であり、つづいて高校在学中の時点や現状における職業意識との関連などを検討していくことにしよう。

第５節　まとめ

本章では、職歴の開始時期、非正規就業経験の有無、離職経験の有無の３つの分類軸を組み合わせて、４つの高卒初期キャリアの類型（「正規継続」「正規離職」「非正規」「中途就職」）を抽出した。

この類型との関連で、初職の就職経路や企業規模など、離職者の初職と現職の比較、初期キャリアと現職の職場環境などを、それぞれ第２節から第４節で検討し、最後に職業生活満足度と進路選択満足度などの初期キャリアに関わる評価的質問を検討した。

次章以下でさまざまの検討を加える前に、ここでの検討結果として、それぞれの類型ごとに特徴的な傾向をまとめておくことにしよう。

① 「正規継続」

学校経由の初職は、会社の知名度、企業規模、労働条件、教育訓練制度など、おしなべて他の類型と比較して良好な条件にあり、高卒3年目まで初職を継続して就業している。また、先輩も多く職場環境も満足すべき状態にある。

ただし、こうした客観的条件に恵まれながらも、主観的な満足度をみると、職業生活に対して不満な者が他の類型よりも多い。この不満の源泉としては、仕事そのもの、あるいは昇進可能性といった将来的なキャリアの展望にあるように見える。

② 「正規離職」

正規就業しか経験していないが、高卒後の初職はやめた。高卒3年目現在で、多くが2社めの仕事へと転職している。この間1ヶ月以上の無業期間を持つ者も2割ほどあるが、必ずしも「失業」という定義を当てはめられる者ばかりではない。現職は、企業規模、労働条件、教育訓練制度などの客観的条件でみると他の類型と比べて見劣りがする。ただし、転職に際しては、休日・休暇などの労働条件面の向上を意図して転職したはずである。

初職において職業面での不満がなかった証拠には、現在の職業の4割が初職と同じ職業になっており、業種でも関連がみられる。

仕事のおもしろさなどに関する評価は高く、全体としての職業生活への満足度もまずまずであるが、高卒後の進路選択への満足度は、他の類型と比べてもっとも低い。

③ 「非正規」

高卒直後の初職において、パート・アルバイト・臨時などの非正規就業から始めた者は少ないが、さまざまの機会にこうした就業を経験し、高卒者のうち13.3%という比較的まとまった数になっている。現在は、ほぼ3分の2が正社員として働いており、この類型はいわゆるフリーター層とは異なっている。とはいえ、組織からの距離をおくという若者の職業意識がこうした経験のなかで醸成されていくのではないかと思われる。

会社や職場の雰囲気にも肯定的な評価を与えており、職業生活への満足度も高くなっている。高卒後これまでの進路選択への満足度は高くない。

④　「中途就職」

高校からの就職斡旋にのらず、卒業後さまざまの経路を経て就職へいたっている。就職経路は縁故や新聞公募、職業安定所など多様であり、業種的に金融業への就職が困難である以外、多様な職業分野で職歴を展開している。彼らの半数以上は離職を経験しており、企業規模や、労働条件、教育訓練制度などでは見劣りするし、また学校とのつながりや先輩もいないところで働いている。

ただし、主観的には職業生活、高卒後の進路選択いずれに対してももっとも高い満足度となっている。

（注）

(1) 両者の「新規高卒者」の概念にも若干の差異がある。労働省の報告では、対象が雇用者のみであり、年齢によって対象を限定しており、高等専修学校卒業者で18歳で就職した者なども含む。これに対して、本調査では、自営業なども含み、年齢による考慮はせず、高校卒業者を対象としている。

(2) なお、初職の産業と職業については、学校基本調査などで全国的な傾向が報告されているので本調査結果については詳述しない（巻末の集計を参照していただきたい）。